

OXFORD
UNIVERSITY PRESS



グレイデッド・リーダーの活用法

中学・高校・大学教師の体験集

当手引書は英語版もございます。

www.oupjapan.co.jp

オックスフォード大学出版局

オックスフォード大学出版局

グレイディッド・リーダーの活用法

中学・高校・大学教師の体験集

目次

はじめに	p.1
古瀬交二／浜松市立西部中学校	p.2
リチャード・アスコー、ダニエル・ステュワート、 チャールズ・ヴァーナー／開成中学校	p.4
ロナン・ブラウン／西南学院大学	p.8
スティーブン・ドナルド／長崎純心大学	p.13
細川博文／福岡女学院大学・福岡女学院高等学校	p.17
石塚弦一郎／神奈川県立上鶴間高等学校	p.19
田澤美加／明治学院高等学校	p.26

はじめに

オックスフォード大学出版局日本支社では、ここ数年、グレイディッド・リーダーをご利用いただく件数が驚くほど増えています。学校の先生方からは、資料のご請求をいただくだけでなく、学校においてどのようにグレイディッド・リーディング・プログラムを実施されているかといったお話や、その際の良かった点や問題点などについてのお声もいただくようになりました。お話を伺うなかで、先生方の一番の関心事は、グレイディッド・リーダーにはどんな素材があるのかということだけでなく、グレイディッド・リーダーが日本においてどのように使われているかという点にもあることが分かりました。

「グレイディッド・リーダーを上手に生かすための日本語版ガイド」

数年前に小社では、ロブ・ウェアリング氏と高橋幸子氏（岡山市のノートルダム清心女子大学）の執筆による「The ‘Why’ and ‘How’ of Using Graded Readers（グレイディッド・リーダーを上手に生かすための日本語版ガイド）」と題された無料の手引き書を発行しました。グレイディッド・リーディングとは何か、なぜ生徒の英語力にかくもプラスの影響を与えうるのか、といったことについて説明した冊子です。小社発行の資料の中でも最も人気のあるものの一つで、多くの先生方から、学校でグレイディッド・リーダーを使い始めるにあたっての大きなきっかけになったと伺っています。（本冊子は、www.oupjapan.co.jp/teachers/tebiki.shtmlより無料でダウンロード可能。）

私たちは、先生方より上述のような情報が欲しいとの要望を受けていたため、この機会に、今度は日本の様々な機関でリーダーがどのように使われているのかをまとめたものを制作するに至りました。

本手引き書について

本手引き書では、日本の大学や中学・高校の先生方が、どのようにグレイディッド・リーダーを使用しているかの実例を紹介します。

寄稿いただいた先生方からは、長さ調整のための編集許可をいただいております。また記事本文では、適当と思われる箇所に以下のような見出しを付けることで、読者が各記事における共通の項目を探しやすいよう便宜を図りましたので、どの記事もほぼ同じようなフォーマットになっていることをご了承ください。

- プログラムゴール
- 背景
- プログラムメソッド／プログラム教材
- 評価
- 結果
- 備考／アドバイス

先生方には、記事の長さは特に指定せずに書いていただきました。内容や書き方、アドバイスも多彩なものになっていますので、面白く読んでいただき、お役立ていただけるものと願っております。

寄稿者

本プロジェクトにご協力を賜りました以下の寄稿者の先生方や学校に対し、この場を借りて御礼を申し上げます。（敬称略）

- 古瀬交二（浜松市立西部中学校）
- リチャード・アスコ、ダニエル・ステュワート、チャールズ・ヴァーコー（開成中学校）
- ロナン・ブラウン（西南学院大学）
- スティーブン・ドナルド（長崎純心大学）
- 細川博文（福岡女学院大学／福岡女学院高等学校）
- 石塚弦一郎（神奈川県立上鶴間高等学校）
- 田澤美加（明治学院高等学校）

寄稿いただいた上記の先生方に質問を希望される方は、こちらまでご連絡いただけますようお願い申し上げます。
elt@oupjapan.co.jp

それでは、リーディングをお楽しみください！
オックスフォード大学出版局日本支社社員一同

Graded Reading Programs Case 1

学校名：浜松市立西部中学校

生徒のタイプ：中学生

先生の名前：古瀬交二

プログラムゴール

- 生徒が英語の喜びと有用性を知ることが促す

背景

政府による教科書改訂や入試制度改革、絶対評価・相対評価の是非など、公立中学校での指導環境は近年、極めて混沌としています。

私たち英語教師は英語の授業において、週に3回という時間的制限の中で何をどう効果的に教えるかという重大かつ緊急の課題に毎日直面しています。また、英語の選択授業の時間をどう使うのが最も効果的であるかも考えなければなりません。選択授業に関しては、授業の目標や、この時間をいかに効果的に英語指導に使えるかといったことについて悩んでいる先生方も多いことでしょう。

英語指導において最も大切なことは、英語の喜びと有用性を生徒に知ってもらうことであると思います。この実現と、生徒に英語を現実的なものにさせることを目的として、オックスフォード大学出版局発行の洋書、*グレイディッド・リーダー*をクラスで使うことにしました。生徒に、英語で内容を理解させ、リスニング力を向上させるのが主な用途です。

プログラムメソッド／プログラム教材

各生徒が同じリーダーを持ち、授業の始めに10分間読ませます。読んだ後、簡単な理解度を測る問題を出し、大まかな内容がつかめたかストーリーについていけているかをチェックします。当初、生徒はリーダーの量をかなり長く感じたようですが、後でお読みになるように、能力がアップし、なんとかなる長さに思えるようになりました。

最初に使用した教材は、*Oxford Bookworms Starters*シリーズの「*Police TV*」でした。スリルのある容疑者の追跡劇に、生徒はすぐに引き込まれました。最初は、1回の授業ごとに2ページずつ読ませました。使われる単語や、理解の手助けになるイラストから内容を把握することができていました。この当初のペースで、生徒は読み進める英語の量を非常に快適に感じ、英語を読むことに楽しみを覚えました。教科書よりもリーダーを読むほうが楽しいと言っていたくらいです。この最初の、興味深いグレイディッド・リーダーとの出会いにより、私の生徒は英語のリーディングに対する抵抗心を乗り越え、英語のみで書かれた本を読むことに楽しさを見出しました。中には、リーダーはマンガみたいに簡単で面白いと

言っている生徒もいました。これも、生徒の興味と注意を引き続けることができた理由のひとつです。次のリーダーは、*Oxford Bookworms Starters*シリーズの「*Girl on a Motorcycle*」でした。まるで映画でも観ているかのような主人公のアクションに、生徒は引き込まれたようです。この段階では、生徒は休憩のあいだに物語について雑談も始めました。生徒が先に読み進むことのないよう、毎回授業の後には本を回収しないといけませんでした。これは、物語への関心を持続させるうえで効果的だったようです。また、きれいに録音された付属のカセットも使って、リーディング力に加え、リスニング力も付けさせるように工夫しました。

生徒の関心を高く維持しておくために、またペースを変える目的で、途中で *Oxford Hotshot Puzzles* シリーズに切り替えました。レベルが高く、知らない単語も多くなる「*The Magician*」と「*Amazon Alert*」を使い始めたときは、苦勞する生徒もいたようです。しかし、リーディングに対する関心を失った様子はなく、2ページごとに登場するパズルも楽しんでいました。レベルが上がるほど、生徒の好奇心は増し、楽しく取り組んでいたようです。

最後に使ったリーダーは、「*Escape from Planet Zog*」でした。中学生には少し長い感じもする本ですが、内容や物語の詳細を理解したのは驚きであり、また喜びでもありました。評価テストの結果、復習をしなくても物語の内容を覚えていることが分かりました。このことから、話の内容自体は、生徒にとって非常に印象的なものだったと言えます。

結果

もう一つ嬉しかったのは、これらの本を読み終えた後、自信を得た生徒が本を持ち帰って、英語だけで書かれた本をどうやって読んだかについて家族に自慢してくれたことです。生徒はある種の達成感を感じ、自信をつけました。これらの本は、生徒のこれからの長い人生における大切な記憶になると確信しています。

備考

私は、過去にも自分のクラスで洋書の英語の本を使おうと試みたことがありました。しかし多くの場合、内容が難しすぎるということで、生徒はこうした教材を拒む傾向にありました。有名な物語でさえも、生徒自身の中に具体的なイメージができ上がってしまっているため、うまくいきませんでした。

今回の成功の大きな要因の一つは、生徒の関心を引くという意味でも、レベルという点においても適したオックスフォード大学出版局のリーダーの優れた内容にあったと思います。価格も低いため、生徒は選択授業で購入することができました。3年生だけではなく、2年生の秋のクラスにも使うことができると思います。浜松市の教員による勉強会で、選択授業の英語クラスでのリーダーの使い方について説明して以来、市内の学校での洋書の使用が徐々に増えています。オックスフォード大学出版局のグレイディッド・リーダーが中学の選択授業での素材として完璧であることは間違いなくと思っています。日本全国で、より多くの先生方がこうしたタイプの授業に、生徒とともに挑戦されることを願っています。

Graded Reading Programs Case 2

学校名：開成中学校

生徒のタイプ：中学3年生男子

先生の名前：リチャード・アスコー、チャールズ・ヴァーコー

多読プログラムディレクター：ダニエル・ステュワート

プログラムゴール

- 会話のクラスで使える話題を与える
- リーディングの速度を上げる
- 幅広く、深いボキャブラリーを身につけさせる
- 英語のリーディングを楽しめるよう手助けする

背景

開成中学校では、3つの生徒のグループごとに異なる多読プログラムを実施しています。ここでは、そのうちの一つを紹介します。このプログラムは、生徒に、英語に取り組む機会をより多く与えるために作られました。授業中だけでなく、授業外で生徒が英語を読むよう、英会話の授業の宿題として行ないました。生徒が読んだ本は、その後、授業のアクティビティで使用しました。この方法は、リチャード・R・デイおよびジュリアン・バンフォードの著による手引き書や、エジンバラ多読プロジェクト（Edinburgh Project on Extensive Reading / EPER）のデイヴィッド・ヒルによる多読の手引き書で述べられている理論をもとに、当校の状況に合わせて修正を加えたものです。現在当校では、3,000冊以上のグレイディッド・リーダーを所有しており、EPERのシステムにより8段階のレベルに分けられています。

プログラムメソッド

年度のはじめに、生徒にクラス分けテストを行ないます。テストには、Secondary Level English Proficiency (SLEP®) テストのリーディングセクションを使用します。SLEP®はTOEFL®と同じ機関が制作したテストですが、海外の大学への留学を希望する人ではなく、北アメリカの高校に留学したい人のために作られたものです（SLEP®について詳しく知りたい方は、Educational Testing Serviceのホームページへどうぞ：www.ets.org）。

続いて、生徒をSLEP®のスコアに基づいたリーディングレベルに分け、そのレベルまたはよりやさしいレベルの本を読ませます。

そのレベルの本を10～15冊読み終わると、次のレベルに上がることができます。

生徒は毎週、宿題として最低1冊の本を読まなければなりません。辞書の使用は自由ですが、どれだけ使ったのかを記録しておかなければなりません。頻繁に辞書を使っている生徒には、もっとやさしいレベルの本をすすめます。

授業が終わりに近づくと、生徒は何百冊もの本が入ったカートから、新しいものを選びます。本は、表紙が見えやすいように並べてあります。カートに並んだたくさんの本を初めて見る生徒たちは、まるでお菓子売り場にいる小さな子供のようにです。学年が進むにつれて、徐々にレベルの高い本をカートに入れていきます。

今回の授業では、生徒はなんらかの形でその本について話し合います。

■ 授業での本の使い方

多読プログラムは英会話のクラスの一環であるため、スピーキングの練習にも本を利用します。以下に、本の利用例をいくつか紹介します。

読書感想スピーチ

読み終えた本についてスピーチの仕方を勉強します。生徒は各々違う本を読んでいるので、クラス全員に対するスピーチの前に、友達同士で練習し、お互いにアドバイスをします。年度内の早い時期からこれを始めるので、他の生徒が読んだ本についての感想を聞き、次に自分が読みたい本を決める際の参考にすることもできます。

説得力をつける

このアクティビティでは、「This is the best book I have ever read... (今まで読んだ中で一番の本です～)」や、「You just have to read this book because... (ぜひあなたもこの本を読んでみてください。なぜなら～)」といった、自分の考えを相手に説得するときによく使われる言葉を習います。新しく覚えた表現を使って、パートナーに自分の本を読むよう説得します。何度かパートナーを交代していくことで、説得力がどんどん上がっていきます。

批判力を高める

同様の方法で、読んだ本があまり好きではなかった場合に柔らかい表現で批判する言い回しも習います。とりわけ、否定的な意見を述べつつも、肯定的な面も言うように指導します。たとえば、「This book has beautiful pictures, but the story is not very interesting. (イラストはキレイですが、ストーリーはそれほどおもしろくありません)」といった具合です。この場合も、同じく複数のパートナーとアクティビティを行なうことで、柔らかい表現で不満点を表現するスキルを向上させます。

ミニドラマ

なるべく数多くの本を集める一方で、同じ本を複数揃える場合があります。これは、劇をする場合に大変役立ちます。生徒は、同じ本を読んだ人を3、4人見つけ、5分の劇を行います。作品中の1シーンを選んだり、物語に合うような新しいシーンを追加したりして、クラス全員の前で演じます。生徒たちは小道具や衣裳を持ち込むなど、劇のためはかなり力を入れて準備をします。

上記のすべてのアクティビティにおいて、どのレベルの本を生徒が読んだかは関係ありません。レベル2の本を読んだ人のパートナーが、レベル4を読んでいる場合もあり得ます。多読のメリットの一つは、自分のレベルに合った本を読めるということです。

評価

プログラムの終わりに、最初とは別のSLEP®テストを生徒に受けてもらいます。最初と最後のテストでのスコアの差は、最終的な成績を決める一要素となります。スピーチやミニドラマなどの授業でのアクティビティの結果も成績に考慮されます。あとは、毎週のリスニングの宿題と、宿題に基づいたテストの結果によって成績が決まります。

結果

SLEP®テストを使うことで、その1で生徒がどれだけ伸びたのかを正確に見ることができます。また、その年度前の結果を生徒に見せることができます。たくさん読んだ生徒ほど力が伸びていることがわかります。これは、新しく始める生徒にとって大変な励みとなります。私達がとっている記録からは、他にも生徒にとって役立つ情報が読み取れます。たとえば、辞書の使用履歴を見ることで、レベルの低い生徒にとっては辞書を時には使うことが有益であることに対し、ある程度以上のレベルの生徒にとっては障害になっていることがわかりました。また興味深いことに、リーディングに費やす時間は、塾で費やす時間よりも英語力の上達に効果があることもわかりました。

この問題は、まだ研究の余地がありますが、SLEP®やTOEIC®といったテストをプログラムの最初と最後の両方で使うメリットが示されています。

アドバイス

できる限り、学校の図書館を利用してください。新しい本を用意するのは大変な作業です。図書館にその作業の一部をお願いできれば、先生は購入する本を選ぶためにもっと時間をかけることができます。作業を分担しましょう。たとえばレベルシールを本に貼る作業だけでもよいので、ほかの先生にも準備の手伝いをお願いしましょう。これにより、自分自身の作業量が減らせるだけでなく、お願いした先生にもプログラムに携わってもらうことができます。また、他の先生方に良い結果が分かると、生徒のプログラムに対する態度に違いが生じることが良くわかりました。尊敬されている先生からのちょっとした言葉は、生徒の読書量を確実に増やします。

EPERのグレイディッド・リーダーのリストを買ってください。これは、EPERのホームページで入手できます (<http://www.ials.ed.ac.uk/eper.html>)。リストでは、どんな本があるのか、どのくらいの年齢層にどの本がいいのかといった情報が参照できるほか、それぞれの本を5つ星で評価しています。

最初は、低いレベルのものをなるべく多く入手してください。そのあと、必要に応じてより高いレベルのものを買えばいいでしょう。1冊の難しい本と格闘するよりも、多くのやさしい本を読むほうが効果的です。

先生自身も本を読んでください。本について、生徒と意味のある議論ができるようになります。また、読む価値のある本だということを生徒に示していることにもなります。

とにかく始めてみましょう。多読について学ぶ一番の方法は、プログラムを開始することです。私たちのプログラムは、5年前にスタートしたときのものとはかなり違います。改善を重ねながら、常に進化しています。毎年、改善の結果が見られるのは、とても楽しいことです。

■ 推薦図書

Richard R. Day and Julian Bamford (1998) Extensive Reading in the Second Language Classroom. Cambridge University Press

David R. Hill (1992) The EPER Guide to Organising Programmes of Extensive Reading. IALS, University of Edinburgh.
Available at: www.ials.ed.ac.uk/eper/eperpubs.html

Rob Waring and Sachiko Takahashi (2000) The 'Why' and 'How' of Using Graded Readers. Oxford University Press, Japan.
Available free at: www.oupjapan.co.jp/teachers/tebiki/tebiki.shtml

Graded Reading Programs Case 3

学校名：西南学院大学

生徒のタイプ：大学生

先生の名前：ロナン・ブラウン

背景とプログラムゴール

当校の学生は、英語で良書を読むことの楽しさは、上級レベルに達しないことには分からないと思っているかもしれません。しかし、この考えは間違っています。西南学院大学図書館の多読（ER）プログラムでは、グレイディッド・リーダーのコレクションと、翻案されていない完全版の原書が用意されていて、あらゆる英語レベルの学生が英語を快適に読む喜びを体験できます。

1,000タイトルを提供するこの多読プログラムでは、*Oxford Bookworms Library* などのシリーズからの同じ本複数冊を含み、現在5,000冊が用意されています。これらフィクションは、多様なジャンルに分かれ、8つのレベルで構成されています。学生は、現在の自分のリーディング力に合わせて本を選び読むことで、抵抗なく読むことができる力を付け、総合的な英語力を高めることのできるオールマイティなリソースを持っているのです。

この多読プログラムは、当大学の英語および英文学専攻の学生の授業を補助・補完するものとして大いに成功しています。授業外で英語と接する機会を増やすリソースとして理想的なものと言えます。さらに、幅広く本を読むことで、授業で出会った単語や表現をさらに別の文脈で知ることができ、より早くそれらの表現が身に付くようになります。多読はまた、極めて積極的な自主学習の場を提供します。このようなリーディングは学生にとって、好きなきに自分のペースで、楽しみながら英語力を伸ばすことのできる素晴らしい方法なのです。

プログラムメソッド

多読は、幅広く、たくさんの本を読むことを意味します。また、全体を理解する読み方でもあり、細かいことを気にしながら精読するものではありません。現在の自分のリーディングレベルが分かれば、(例えば、1ページに知らない単語が3、4単語以内であれば)、生徒は1分間に145単語以上という適切なスピードで読むことが容易にできるようになります。

レベルと同様に大切なのが、内容やジャンルです。「*The Scarlet Letter*」や「*Far from the Madding Crowd*」、「*Oliver Twist*」といった古典文学の翻案版は現在でも広く読まれています。それ以外の現代文学作品の人気の高まっています。たとえば、「*Skyjack!*」や「*Reflex*」、「*Night Without End*」のような推理ものやアドベンチャー、「*Grace Darling*」や「*The Death of Karen Silkwood*」、「*Cry Freedom*」といった実話もの、エイミー・タンやモーヴ・ピンキーといった著者による人間ドラマなどがあげられます。

それ以外に人気のあるジャンルは、恋愛もの、社会問題、犯罪もの、サイエンス・フィクション、動物もの、ファンタジー、ホラーなどです。このように、学生には幅広い選択肢が用意されています。

結果

当大学の多読プログラムでは、上述のようなアプローチを追求することによって大きな教育的効果を得られることが何度も証明されてきました。総合的な英語力の向上やボキャブラリーの増加に加え、リーディングで自信が付いたことが理由の一つとなって、英語学習へのモチベーションが高まりました。ライティングやスピーキングのスキルも同様に向上しました。また、スピーキング力も向上するという結果も出ています。さらに、やさしい文章をたくさん読むことで、速く読むために必要なスムーズな目の動きも身に付きやすくなります。

備考

結論として、エジンバラ多読プロジェクト（Edinburgh Project on Extensive Reading / EPER）のディレクターを務めるデイヴィッド・ヒルによって指摘された、英語の小説を読む利点のいくつかを思い起こしてみる価値があります。まず、小説が提示する世界に関する知識は、文化を超えて共有されます。恋愛や冒険、犯罪は人間がかかわるものの一部であり、誰もが知っていることです。次に、設定や人物、物語、テーマには無数のバリエーションがあるので、1つとして同じストーリーはありません。3つめに、恋愛やコメディ、推理ものは、通常の授業で多く使われるノンフィクションからの良い気分転換になり得ます。4つめに、小説は、愛や結婚、環境、人種差別、道徳的尊厳などといった現代において重要な問題を議論する場でもあります。

最後に、物語の次を読みたいという本能的欲望は、文章自体にとらわれず、内容を知るために英語を読もうという気持ちを刺激するための最適な感情であり、これによって生徒は自然に言葉を吸収することができます。

以下は、私が西南で教えているリーディングコースのうちの一つの講義要項です。

西南学院大学 英語専攻2回生のための英米文学読書 講義要項／ロナン・ブラウン

■ コースの目標

前期・後期に渡り週1回行なわれる本コースの主たる目的は、リーディング力を中心とした総合的な英語力を向上させることにあります。また、定評ある英米の小説を読むことで、イギリスやアメリカの社会的・文化的事項を広く深く理解できるようになることが期待されます。さらに、

- * 長文をよどみなく読むスキルが磨ける
- * 文法やボキャブラリーの理解が深まる
- * 物語の次を知ろうとするなど英語を使う現実的な理由ができる

* 授業中に学んだ単語や表現を授業外でも練習できる
といった利点があります。

■ メソッド

前期および夏期休暇中は、イギリス人、アイルランド人、オーストラリア人著者による、イギリス、アイルランド、オーストラリアを舞台にした本を読みます。後期および冬期休暇中は、アメリカ人、カナダ人著者による、北米を舞台にした本を読みます。

■ 授業でのリーディング

クラス全員が同じ本を使い、教師の指導のもとで一斉に読み進めます。使用教材は、「*The Joy Luck Club*」などの上級レベルのグレイディッド・リーダー（例：西南レベルの赤や *Oxford Bookworms Library* のステージ6）です。6週間に渡り、学生は自宅でこれらの本を読みます。毎週の小テストで最初に理解度をチェックした後、小説のジャンルや社会的・文化的背景、設定、物語など、本の詳細を授業で勉強します。また、本のテーマや著者の目的、キャラクター、イメージやシンボルの使用といった事柄を話し合います。このように、授業でのリーディングでは、リーディングの質を高め、それによって正確な読解力を養います。

■ 図書館を利用したリーディング

10ヶ月以上にわたり、学生は各自、西南図書館多読プログラムより本を借り、授業外でリーディングをします。図書館多読プログラムでは、20ジャンル以上、1,000冊を超えるタイトルを複数部ずつ所蔵しています。本は8つのレベルに分かれており、各自のリーディング力に合わせて楽しく読むことができます。辞書を使わずに最低96%の単語が分かることが、自分のリーディング力に合った本を選ぶ基準となります。このように、図書館を利用したリーディングは、リーディングの量を増やし、それによって速く読み進める力を養います。

■ リーディングノート

授業でのリーディングや図書館を利用したリーディングで本を読み終わると、生徒はリーディングノートにその本のレポートを書きます。ノートの最初のページには、参考用途や目次用途で使う *Personal Reading Record Grid*（個別リーディング記録表）を設けます。ノートの準備や記録の仕方については、詳細に説明し、クラスでストーリーの口頭説明をするときや、ボキャブラリーレコードの参照用などとして使います。

ブックレポートには、本のタイトルや著者、舞台、ジャンル、レベルなどのデータを記入します。これに続いて、主な登場人物のリストを書きます。キャラクター相関図や系図を使うのも効果的かもしれません。その後、物語の簡単な要約を書きます。その際、図や絵を使って説明を補ってもかまいません。

レポートの中で最も大事な部分は、本に対する生徒自らの回答です。回答が書きやすいよう

に、話の中で興味深かった点、あるいは理解するのに苦労した点や、好きな、あるいは嫌いな登場人物、最も印象的なシーン、物語の展開方法、物語から得た人生の教訓といった項目を含む感想項目リストが配布されます。感想の英文は、文法やスペルの面での評価をするのではなく、本の内容やテーマ、トピックにどれだけ熱心に取り組んだかを評価するものとして使います。

■ リーディングの目標および評価

この1年間のコースでCを修めるには、授業でのリーディングと図書館を利用したリーディングで、最終的に1,000ポイントを取得する必要があります。Bでは1,200ポイント、Aでは1,450ポイントが必須となります。

前期を通過するには、後期の最初の講義までに500ポイントの取得が必要です。前期に、授業でのリーディングで2冊を読み、リーディングノートに読んだリーダーのレポートを書き終わると、250ポイント（各125ポイント）が取得できます。ページ当たりのポイントは下記の通りです。

西南レベル	1ページ当たりのポイント
ピンク	0.25
オレンジ	0.50
黄色	0.75
緑	1.00
紫、青、赤	1.25
白（文章のみ）	1.35

後期は授業でさらに2冊を読み、250ポイントの取得になります。つまり、授業でのリーディングでは、年間で4冊、合計500ポイント分を読みます。したがって、最終的に最低目標の1,000ポイントを達成するには、各自で500ポイント分の図書館を利用したリーディングをしなければなりません。このためには、西南レベルでの緑～紫～青～赤（*Oxford Bookworms Library*のステージ3～4～5～6に相当）の本を選んだほうがいいでしょう。

獲得したリーディングポイントは、個別リーディング記録表に正確に記録します。読んだ本のポイントを計算する際、イラストのあるページはポイントには含まれませんので注意してください。たとえば、「*The Joy Luck Club*」は105ページありますが、イラストが7つあるので、123ポイント（ $105 - 7 = 98$ ページ $\times 1.25 = 123$ ポイント）となります。

■ 映画と日本語訳

生徒は、映画版を見たことがある本は読まないよう指導を受けます。また、日本語版を読んだことがある本も避けてください。これは、次に何が起こるかが分かっていると、

1. 読みながら次を予測するという重要なスキルが身に付かない
2. 読解力、とくに文脈から意味を推測する力が向上しない
3. 次に何が起こるかが知りたいという、読書に対する極めて重要な動機を失う

という結果を招くためです。

授業でのリーディングについては、時間があれば、本を読み終えた後で映画版を観ることにします。

■ 夏期休暇中の推薦図書

夏期休暇中は、好きなイギリスおよびアイルランド、オーストラリアの作品を読むことができます。ただし、下記のグレイディッド・リーダーを薦めています。

西南レベル：紫 Oxford Bookworms ステージ4	西南レベル：青 Oxford Bookworms ステージ5	西南レベル：赤 Oxford Bookworms ステージ6
<i>The Songs of Distant Earth and Other Stories</i> (サイエンスフィクション)	<i>Heat and Dust</i> (人間ドラマ)	<i>Vanity Fair</i> (古典)
<i>Reflex</i> (推理)	<i>The Riddle of the Sands</i> (推理)	<i>Pride and Prejudice</i> (古典)
<i>Dr Jekyll and Mr Hyde</i> (ホラー)	<i>Far from the Madding Crowd</i> (古典)	<i>The Woman in White</i> (ミステリー)
<i>A Dubious Legacy</i> (人間ドラマ)	<i>Great Expectations</i> (古典)	<i>Night Without End</i> (推理)

■ 冬期休暇中の推薦図書

冬期休暇中は、好きなアメリカおよびカナダの作品を読むことができます。ただし、下記のグレイディッド・リーダーを薦めています。

西南レベル：紫 Oxford Bookworms ステージ4	西南レベル：青 Oxford Bookworms ステージ5	西南レベル：赤 Oxford Bookworms ステージ6
<i>Washington Square</i> (古典)	<i>The Age of Innocence</i> (古典)	<i>The Joy Luck Club</i> (人間ドラマ)
<i>Little Women</i> (古典)	<i>King's Ransom</i> (犯罪)	<i>American Crime Stories</i> (犯罪)
<i>The Scarlet Letter</i> (古典)	<i>The Accidental Tourist</i> (人間ドラマ)	<i>The Fly and Other Horror Stories</i> (ホラー)
<i>The Big Sleep</i> (犯罪)	<i>I, Robot-Short Stories</i> (サイエンスフィクション)	<i>Cry Freedom</i> (実話)

Graded Reading Programs Case 4

学校名：長崎純心大学

生徒のタイプ：英語専攻・非専攻の大学1、2回生

先生の名前：スティーブン・ドナルド

プログラムゴール

- 英語を読む習慣を付けさせる
- 常にグレイディッド・リーダーを携帯する習慣を付けさせる
- リーディングの流暢性、スピード、理解力を高める
- 読みながら自然にボキャブラリーを増やす
- 毎週または隔週、生徒にリーディングターゲットを与える
- 英語の本を読めるという自信を付けさせる
- 自主的なリーディングに導き、より多くの本を読ませる
- 各自のレベルや英語力に合わせて読んだものに対して単位を与える

背景

■ 私の担当クラス

- * 1年間のリーディングクラスを2クラス担当しています。1回90分の講義です。
- * 1回生は英語のレベルが低く、情報科学を専攻している学生です。
- * 2回生は英語のレベルは低く、英語と情報科学の学生が混合したクラスです。
- * いずれのコースも、講義外で学生が各自行なう、リーディングによる自己評価の要素を大きく含んでいます。
- * 最終的な成績の50%を自己評価を基に付けました。自己評価では、多読を用いました。残りの50%は、講義内に行なわれたテストや出欠、期末テストの結果によって評価しました。

プログラムメソッド

■ グレイディッド・リーダーの紹介

1. 大学図書館所蔵のグレイディッド・リーダーを生徒に紹介します（グレイディッド・リーダーはすべてジャンルごとに分類されていて、見やすく、選びやすいようになっています）。
2. 毎週、または隔週で設定された分量を読むよう指示します。
3. 本の選び方を指導し、「リーディング・ポートフォリオ」のシステムについて説明します（14ページの評価参照）。2度目の講義では、クローズテスト（穴埋め式のリーディングテスト）を行ない、本を読むことで今後このスコアを上げていくことが課題となることを伝えます。

■ テキストの選定

学生に下記のことを伝えます。

1. グレイディッド・リーダーを1冊選び、適当なページを開く。
2. そのページを読む。
3. その中で、読めない、意味が分からない、または知らない単語の数を数える。
4. 5単語以上あれば、それよりもレベルの低い本に変える。5単語未満であれば、自分にあったレベルなので、そのレベルで本を探すか、難しく感じるようであれば一つ低いレベルの本に変える。

■ 授業にて

最初の3回は、グレイディッド・リーダーやポートフォリオについて話し合ったり、問題があればそれに対応したりします。また、行き詰っている学生がいないかを私自身で確認します。これは、講義の最初の10～15分で行なう持続的黙読（Sustained Silent Reading / SSR）のあいだに見ます。これを毎回行なっています。

読む際に指や鉛筆で文字をなぞっている人や、一字一句を辞書で調べている人（レベルの高すぎる本を選んでいる可能性があり、レベルが合っていれば辞書は不要）を確認します。自分で本を買っている人や、読むことに関心のない人を確認します。3回目か4回目の講義までには、大半の学生は何をすべきかが分かってくるので、それ以降は指導をしたりリーディングスキルを伸ばしたりすることに集中できます。

1回生にはリーディングのテキストを使い、グレイディッド・リーダーを補助教材としました。1回生は1学期（セメスター）のあいだに、自分に合ったレベルの本を最低1冊読みます。2回生は1週間に1冊です。このリーディングを10～12週間に渡って行なうのを目安にします。

2回生のリーディングクラスではテキストを1冊使いますが、1学期のあいだに容易に終えることのできるものを使います。グレイディッド・リーダーは宿題として使います。2回生のリーディングクラスは多読がメインで、学生は自分のレベルに合った本を毎週1冊読みます。これもまた、上述のようにリーディングポートフォリオに記録します。また、1学期のあいだに容易に終えることのできるテキストのほかに、Science Research Associates (SRA)や新聞も講義で使います。

評価

生徒はそれぞれリーディングポートフォリオを作成します。これは、所定のシートを埋めて作るフォルダーで、読んでいる途中や読後に書きます。内容は下記の通りです。

- ブックレポート
- ウィークリー・リーディングシート
- リーディングリアクション（感想）シート
- 学生が記録するリーディングサマリーシート。自分の進歩が確認できます（読んだ本、クローズテストのスコア、リーディングのスピード、1週間に読んだページ数、読んだ本の中でレベ

ルの一番低いもの／高いものなど)。このシートはまた、リーディングプログラムの目標をどれだけ達成できているかを評価する際にも使います。

- その他の資料：オックスフォード大学出版局のグレイデッド・リーダーに基づいたクローズテスト、ブックトークシート（講義中に自分の読んでいる本について議論するときを使うために配布します。ほかの学生の薦める本や薦められない本について聞く機会も得られます）、速読記録シート、SRAアンサーシート、ニューズペーパーアクティビティシートなど。

結果

- 多くの学生が、リーディング力が伸びたと感じ、学期が進むにつれて意気込みを増してきました。
- 1回生で一番多く読んだ学生は、22週間のうちに28冊で、レベルは *Oxford Bookworms Library* のステージ1から4まででした。リーディングスピードは、1分間に78単語から始まり、プログラムの最後には156単語にまで上がりました。この生徒は現在2回生で、*Harry Potter* の2冊目に突入しています。
- 同プログラムで読んだ量が一番少なかったのは、22週間で15冊でした。この生徒の場合、*Oxford Bookworms Library* スターターからステージ2までのレベルを読みました。リーディングスピードは、1分間に33単語から75単語に上がりました。
- どちらの学生もこのプログラムは大変だったものの、自信がつき英語のリーディングに積極的に取り組むことができたと言っています。

アドバイス

■ 最初の抵抗について

多くの学生は最初、英語で本を読むことに抵抗があります。難しすぎる、文法が複雑すぎる、英語が得意ではないなどといった理由からです。また、こうした学生の大半は第1言語においても読書が苦手なようです。自分に合ったレベルの本を選ばせるということが大切です。私の場合、SSRの時間を使って行き詰っている生徒を見つけ、授業中または授業の後でレベルに合った本を選ぶよう特に注意を払うようにしました。

抵抗のある学生には

- * レベルに合った本を使う。
- * 理解を促すよう、イラストの多い本を使う。
- * 柔軟な評価を行なう。書面の代わりに口頭でのレポートができる場合は、その機会を与えます。書面でのフォーマットは指針として使い、2、3回は口頭での報告を認めています。
- * 常にこの学生たちをチェックし、本について、特に選んだ本について話す機会を設ける。これにより、先生がついていること、関心を持って接していること、力になりたいことを伝えます。一人ではないのです。

私は常に、学生たちが本を読むであろうこと、読めるであろうこと、そして自分のレベルや能力にあったものを読むであろうことを期待して講義に出ます。すべての学生がこのことを理解し、この期待に応じていけるように努めています。

■ お手本としての教師

教室において教師は重要な存在です。学生は、(最初の) インスピレーションを主に教師から受け取り、一番のお手本として手助けや指導を請う対象です。私は、いつも教室に本を持ち込み、学生がSSRをしているあいだに自分も読書を行います。定期的に生徒の様子を見ますが、それ以外は読書に集中しています。これにより、

- * 読書が重要であること
- * これからも一緒に読んでいくこと

を伝えたいと思っています。

■ 夏のリーディング

リーディングに、たとえば夏期休暇などのブランクができると、後期の始めに、前期に読んでいたところの続きにすんなりと入れずに苦労します。この対応策として、夏期休暇の間も本を読むことを奨励し、成績に反映させました。夏の間1冊読むごとに、後期に読む本を1冊ずつ減らせることを伝えます。後期が始まると、その同じ生徒に通常どおりに読み続けるよう奨励し、これにより最終の成績に反映されるボーナスポイントを追加します。これにより、AがA+に上がる例がありました。

Graded Reading Programs Case 5

学校名：福岡女学院大学／福岡女学院高等学校
生徒のタイプ：大学生／高校生
先生の名前：細川博文

プログラムゴール

- リーディング力を総合的に伸ばす
- 英語語彙力をつける
- 多読を通して文法を理解する

背景

私は、大学でリーディングクラスを教えています。今学期は26名の学生が私のリーディングクラスで学んでいます。授業では、下読みや推測、スキミングやスキミングといったリーディングスキルを主に教えます。また、パラグラフ構成や、パラグラフのパターンも学びます。学生は、毎週の授業によって50点、そして、授業外で個別に行なう多読によって残りの50点を取得します。

プログラムメソッド／プログラム教材

- 学部事務所で本を借りる際に、レポート用紙を受け取ります。事務所は土・日曜以外の9時～5時まで開いています
- 生徒は、一冊を読み終わるとレポートを提出しなければいけません。
- 大学では、*Oxford Bookworms Library* を2セットと、*Oxford Bookworms Factfiles* を1セット所有しており、学部事務室のカウンターに展示されています。つまり、1、2回生のリーディングクラスを受講中の学生は、常に250冊以上の本が利用できるということです。

評価

■ ブックレポート

レポートには3つのセクションがあります：

1. 学生が読んだ本を要約し、最も面白かった部分を書き、なぜそう思ったのかの理由を説明します。これにより、ストーリーの要約の仕方を学びます。初心者には簡単ではない作業ですが、すぐにうまく要約を書けるようになります。
2. 次に、最も感動した部分を書きます。事実関係の情報が求められるため、ストーリーをもう一度見返しながら、気に入った部分を用紙に書きます。
3. しかしながら、最後の部分が、学生の創造的なコミュニケーション能力を育成する上で、もっ

とも重要なものとなります。学生は、ここで初めて上記の2に書いた箇所をなぜ気に入ったのか考える必要が生じます。自分の考えを言葉にし、人にきちんと伝わるよう明確性が求められます。この部分には私がコメントを入れますので、学生はレポートを通じて教師とのコミュニケーションができるようになっていきます。

学生が提出したブックレポート全てに目を通します。そして、学生が書いたことについて、できる限り多くのコメントを入れます。学生は、レポートが返ってくると、私のコメントを読みます。このブックレポートを通したやり取りが、生徒のモチベーションを上げ、読書への関心を高めるのです。学生は、ブックレポートを書くことは、一方向的な情報処理ではないと感じてくれています。むしろ、誰かが耳を傾けようとしてくれることが分かることによって、尊重されていると感じると言っても過言ではないと思います。ブックレポートは、読んだ内容に関する学生のコメントをうまく引き出しています。この作業によって、英語のスピーキングも上達すると思います。

結果

やる気のある学生は、一学期に50冊以上もの本を読みます。平均的な学生で約30冊、あまりやる気のない学生でも10冊以上は読んでいます。しかし後期に入ると、優秀な生徒はすでにレベル1～3の本を読み終えているため、本はさらにページ数が増えていきます。レベル3以上の本には1冊につき2点をつけます。学生は後期も本を読み続け、レベルは4、5になります。

備考

■ 高校でのケース：スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) プログラム

福岡女学院高等学校は、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール指定校の100校の一つです。私たちの学校では、課外活動として *Oxford Bookworms Library* と *Oxford Bookworms Factfiles* を読みます。生徒は、隔週でブックレポートを提出します。1年生から3年生まで約150名の生徒が、SELHiのクラスで学んでいます。私は、隔週月曜日に私の研究室に届く彼女たちのレポートを読んでいます。つまり、私は一週間おきに150人分のブックレポートを読み、それぞれにコメントを書いているのです。でも苦痛ではありません。楽しんでいます。

高校生にとって、最初はストーリーの要約は難しいのですが、「What happened then? (それでどうなったの?)」や「Tell me more! (もっと教えて!)」といった魔法の言葉によって、ストーリーについてもっと色々書くことを覚えていきます。ここでも生徒は、大学生と同じように、英語で文章が書けるのだという自信を強めるようになります。この自信が、もっとたくさん読もうというモチベーションになります。実は、高校の生徒たちは、誰がレポートを読んでいるのかを知りません。ただ、担当の英語教師ではないということだけは知っています。彼女たちにとって、私は完全に無名なのです。この匿名性が、彼女たちをより読書に貪欲にさせているように思えます。一度始めると、やめたがらないからです。

Graded Reading Programs Case 6

学校名：神奈川県立上鶴間高等学校
生徒のタイプ：高校3年生
先生の名前：石塚弦一郎

プログラムゴール

- 英文を無理なく読むことの楽しさを通じて英文に親しむ

背景

- 英語の得意な生徒と不得意な生徒の格差がかなり大きいため、同じ教材で同じことを教えていくだけでは、双方のプラスになりにくいと判断しました。
- 生徒が自分にあったものを選択し、どんどん読み進めることで、1の欠点を補えるのではないかと判断しました。
- 指定の教科書を読むだけでは、読まされているという受身的な側面を完全に排除することが困難です。そこで、もっと生徒が自発的に英文を読むという態度を養う方法を模索したかったのです。
- 教科書だけでは、読む語数が年間を通して圧倒的に少なく、ある程度の量の語数を読破するためには、以下の試みが必要だと感じました。

プログラムメソッド

■ 多読指導で特に配慮した要素

- * 一人一人の生徒の興味・関心にあった内容の教材を選べるようにする

いわゆる従来から行われている一斉指導式の授業では、指定された教科書のレッスンを1クラス40人程度の生徒たちに教えていきます。しかし、これだけだと生徒の多様な興味・関心に応じることは難しく、動機付けという面で効果が薄いのです。やはり、様々なジャンルの洋書を用意し、その中から自分の興味に合うものを自発的に選べるという要素が、生徒の動機付けを高めさせる大きな要因になると思われます。

- * 一人一人の生徒の英語力のレベルにあった教材を選ばせるようにします

本校では、上位の生徒と下位の生徒の学力格差が顕著です。例をあげれば、入学時においては、簡単な英単語のスペルさえ満足に書けない者をはじめ、中学段階の文法・構文把握力などが不十分な者もかなりいます。他方では、英語を得意とし、将来それを生かした道へ進みたいと強く願う者もいます。その状態で、ひたすら同一の教科書を使って教えていくだけでは、どちらの生徒にとっても英語力を最大限に伸ばすには不適切です。よって、レベル的にはかなり幅広い内容をもった洋書を揃えるように配慮しました。

■ 教材について

教材の選定

可能な限りとはいえ生徒個人が多読用洋書を多く買い揃えることは難しいので、学校で教材を揃え、それを授業中に生徒が自由に選べる環境を確保することにしました。

また、それにふさわしい洋書教材としては、世界中で広く用いられ評判も確立されているものが適切であると考えました。いわゆるグレイディッド・リーダーやガイディッド・リーダーなどと呼ばれているシリーズで、使われている語彙・文法をコントロールしてレベルごとに分かれているものです。さらにこれらの教材は読み物としての面白さにも十分配慮して作られている点も選択した理由です。これらの教材を600冊程度用意しました。(なお、対象の生徒にこの冊数分の購入費全てを負担させることは不可能なため、図書費・特色関係(国際理解を目的としたリーダー購入費)の予算からかなりの面で支援して頂いたことをここに感謝します。)

教材の種類と整備

購入した数種類の教材に対し、グレードごとに色の異なるラベルを背表紙に貼っていきました。詳しくは以下の通りです。(なお、下に行けば行くほど、レベルは上がっていく形になっています)

<i>Penguin Young Readers</i>		<i>Oxford Dolphin Readers</i>		
レベル 1	ピンク	スターター		
レベル 2		レベル 1		
レベル 3	グリーン	レベル 2		
		レベル 3		
レベル 4	イエロー	レベル 4		
<i>Penguin Readers</i>		<i>Oxford Bookworms Library</i>	<i>Oxford Dominoes</i>	<i>Oxford Bookworms Factfiles</i>
レベル 0	オレンジ	スターター	スターター	スターター
レベル 1	シルバー			
	ゴールド	ステージ 1	ステージ 1	ステージ 1

また、生徒には、授業が軌道に乗るまでの指導として、ピンクレベルの本から順に読み始めるように指示を出しました。同じ色のラベルの半分以上の冊数を読破したら、一段上のレベルに上がれるように工夫をしました。

オックスフォード大学出版局の多読用教材に関する詳細は、以下のウェブサイトをご覧ください。

www.oup-readers.jp

さらに、本の貸し出し・返却等の管理を簡単にするために、ブックトラック(移動式の書籍棚)を2台購入し、その中にブックエンドを用いて色別に教材を配置しました。

また、以下の補助教材を用意しました。

- オリエンテーション時に用いるための教材構成・授業展開法を説明したプリント
- 教材の一覧表
- 生徒が読んだ本についてレポートするためのブックレポート（1冊につき1枚提出）
- ブックレポートをまとめる学期ごとの集約プリント

■ 授業方針について

1. 基本的に各生徒に好きな本を選ばせて読ませます。もし、途中で自分に合っていないと感じたら、躊躇せず交換させます。
2. 多量の教材を目の前にして、どれから読んでいいのかわからない生徒もいるため、1つの指針として、ピンクレベルから順々に読み進めていく形を採用します。
3. 読む際は、辞書は使わず、大意をつかみながら楽しく読むことを優先させます。

■ 実際の展開

高校3年生のリーディングの授業は3単位ありますが、その内、2単位を指定の教科書に基づいて授業を行い、残りの1単位をこの多読にあてました。(50分の授業の内、基本的には最初の15分を小テスト実施にあて、残りの35分を個別の読書時間にあてました。理由は、50分間を完全に読書にあてると集中力が持たない生徒が、若干ですがいるからです。また、他の2時間で行っている教科書の理解の徹底を図るためにも、小テストを毎週行う必要があると判断しました)

小テスト終了後の展開をまとめると・・・

1. 生徒にブックレポートを配布し、生徒は、教室の前に設置されたブックトラックから自分の好きな教材を選び、それぞれの机で読み始めます。
2. 読み終わると、各自ブックレポートに必要事項を記入し、時間があれば次の本を読みます。
3. 最後にその時間内で作成したブックレポートを全て回収します。なお、この回収したレポートはクリップでとめて、教員側で保管します。さらに、次の授業時に再び返却し、次の授業で読み作成したレポートと合わせて、再度回収します。つまり、授業の回数に応じて、保管するレポートはどんどん増えていく形になります。
4. 学期の最後にたまったブックレポートを学期ごとの要約プリントに記入させます。これで、その生徒がその学期に何冊読んだか、何語読んだかが一目瞭然となります。(これをもとに評価をします) 各生徒が読書をしている間は、できるだけ期間巡視を行い、生徒の質問などに答えるようにしました。なお、各教材は授業時間内に限って貸し出しを行い、自宅に持ち帰ることはさせませんでした。これは、蔵書数に限りがあるため、あるクラスで貸し出しをしている間に、他のクラスで本の選択が満足にできないという事態を引き起こさないためです。また、返却が徹底しない可能性が高かったことも理由です。一方で、放課後に曜日と時間を指定して、希望者には自由に本の貸し出しを行いました。その場合もその日のうちに返却を義務付けました。

授業で配布したプリント

読み進め方の注意

1. 基本的に、本を選ぶ際は自分の好きなものを中心に選んで下さい。
 2. もし、途中で面白くないと思ったら、別の本を探して下さい。
 3. あまり辞書は引かずに、筋がとればOKというつもりで読み進めて下さい。
 4. なお、読む際は、レポートに記入しますので、読むのにかかった時間を計って下さい。
(リーディング・スピードの算出のため)
 5. 読み終わったら、所定のブックレポートに記入をし、提出して下さい。(時間の関係でその本を読むのが途中になった場合もそこまでの読書時間をレポートに記入し提出すること)
1回の授業で1冊読むと、10ポイント加算されます。2冊目に進んだ場合は、15ポイント、2冊目を読み終わった場合は20ポイント加算されることになります。
- * 提出されたブックレポートの内容と、読んだ語数の総計で成績評価をします。読めば読むほど成績を上げる予定でいます。
 - * 英語が得意な人も不得意な人も *Penguin Young Readers* (PYR) のレベル1またはレベル2 (ピンクラベル) から読み始めること。(または、*Oxford Dolphin Readers*のスターターとレベル1)
 - * 自分が読んでいるレベルがやさしいからといって、むやみに次のレベルへ上がらないこと。
 - * ある程度の冊数*を読んだから、次のレベルへ上がること。
* PYRの場合、各色の半分以上の種類を読んだから、次のレベルへ上がること。
なお、その際は担当の先生に了解を得てからにして下さい。
 - * 上のレベルを読んだ後で、1つ下のレベルの本を読むのは、良い読み方なのでお奨めします。(パンダ読み*)
* パンダ読み：難しい本が読めるようになって、並行してやさしい本を読むこと
(引用) http://www.seg.co.jp/sss/information/sss_lingo.html
 - * なお、毎週1回授業で読書時間を確保して読み進めますが、さらに読みたい人は、以下の曜日・時間に貸し出しをしますので、「英語科教材室」か「職員室」まで、担当の先生を探して下さい。
火曜日・水曜日・木曜日の3日間
午後1:30~3:00まで
なお、この時間内に返却して頂きますので注意して下さい。

評価

いわゆる相対評価や絶対評価ではなく、1学期を通してどれだけ生徒が英語を読んだかを評価します。つまり生徒は努力した分だけ認められるということになり、多読への動機付けが高まると期待できます。その評価方法についてはあとで述べたいと思います。

一番大きな比重を占めたのは、生徒が毎時間提出するブックレポートをまとめた学期ごとの要約プリントです。その中で、読破した冊数の合計と語数の合計を、ある比率を掛けてポイント化（B値）し、通常の授業での成績分（A値）と適度な比率で合わせ、その生徒の評価を行いました。

ただし、その比率をどの程度にすればいいのかという問題や、読書記録に書かれたことをそのまま信頼して評価基準に入れてよいのかななどの問題は、今後も継続して検討すべき課題です。

結果

生徒は、かなり積極的に本を読んだようです。6月頃にスタートし、翌年1月まで、ほぼ毎週実施しましたが、この時間を楽しみにしていた生徒が多数いました。英文をスラスラ読むことの楽しさを通じて、英文に親しむという当初の目標は到達できたと思われます。また、6クラス中で最も多く読破した生徒が必ずしも普段の授業では英語が得意な生徒ではないということも付け加えます。英語に対する動機付けをするという意味合いにおいては、この試みは成功だったと思いたいのです。

当初、6クラスという大きな規模でこの多読指導を実施するのは不可能であると思われました。しかし、この1年間実施してみて、ある限られた環境の中で、ある程度の限定した目標設定をすれば、決して難しいことではないということがわかりました。

以下に生徒からの反応を引用しておきたいと思います…

- * 最初は読むのにかなりの時間がかかったけれど、何冊か読む内に時間がかからなくなった。読むコツが分かったような気がする。
- * 1年間通して絵本と言えども、私には読めないんだろうな…とっていました。でもそこそこ読めて嬉しかったです。これからは学校の外でも辞書を片手に読んでみようと思います。英語は私の夢です。
- * さし絵付きだったので英文と照らし合わせながら読むことで、英文を理解しやすかった。レベル別に分けてあるのも良かった。
- * 今まで英語の本を読む機会がなかったので、良い経験をさせてもらった気がします。1週間に1度なら息抜きにもなるし、ずっと教科書で勉強しているよりもこういう時間があるほうがいいな…と思いました。

- * こんな授業ははじめてだったので、とても新鮮で楽しかったです。授業が眠い時間帯の時は辛かったけど、英語で本を読むのもいいなあと思いました。
- * 英語の文なんて、教科書を読むくらいだったけれど、本を読む機会があって良かった。文の構成がちょっと分かるようになった。これからも本屋さんで面白そうな英語の本とか探して読んでみようかと思います。
- * 多読は最初イヤだったけど、今は楽しく読書をしている。少しは長文や英語の本を読む力がついたような気がする。ゴールドを読めなかったのが残念…
- * 昔読んだことのある話でも、英語で書かれているだけで全く違う印象があって面白かった。この多読の授業は是非続けて欲しいと思います。
- * 英語に慣れる所が良かったです。あと、その人の能力や意欲によって読みたい本は自分で選べるようにした方が良いと思います。私はピンク色を読んでいる時はとても辛いな…と思っていました。オレンジ色から少し面白くなってきたのに終わってしまって残念でした。
- * 数を決めてどんどんレベルを上げていくというのは、自分では目安をつけづらいので、あらかじめ決めてあって良かったです。個人的な感想としては、普段の生活ではこんなに英語に触れる機会がないので、すごく良かったです。ただ、私の読むペースが速くないので、最後まで行けなかったのは残念でした。
- * これが最後の授業かと思うと悲しいです。卒業したくナイヨー！普段英語の本なんて読まないから、いい経験になったと思います。1年の時からやっていたら、英語が苦手な子も、英文の仕組みとか語順を理解するのが早くなると思います。
- * 毎回普通の英語の授業をやるより、こういう多読の方が良かった。英語が上達したかは分からないが、英語という科目が以前より少し好きになった。多読をやって良かったと思う。
- * 英語の本なんて読む機会がなかったので、読む時間を設けてもらえて良かった。辞書を使わずに読めた時は、すごく嬉しかった！ただし、読んだ本の数や語数を成績に入れられるのは…読むだけが良かったです！

備考／アドバイス

- ブックトラックが貧弱だったためか、教材を教室へ運ぶのが、大変でした。(なお、来年度以降、もし1、2年生で実施することになると、違う階の教室へ移動しなければならず、この問題は大きなものになります)
- 「多読」は、その生徒の自主性に完全に依存していく形式の授業です。そのため、別の意味でのノルマや規律を確立しないと、中にはまじめに取り組まない生徒がでてくる可能性があります。その辺をどうするかが今後の課題です。
- 生徒の好み・レベルに合わせて、さらに多くの種類の教材を揃える必要があります。心が深まると思うので後輩にもおすすめです。

Graded Reading Programs Case 7

学校名：明治学院高等学校

生徒のタイプ：高校2、3年生

先生の名前：田澤美加

プログラムゴール

辞書を使わずに、英語の本を100万語読むことをめざしています。それは、やさしい本から読み始め、英語のペーパーバックを読めるようになる、ということです。

背景

日頃授業をしていて、一文一文の構造にこだわるあまり、和訳はできるけれど文章全体で何を言いたいのか理解することが苦手な生徒がいます。また、時間内に英文を読み終えることができなかつたり、知らない単語にひっかり英文が読めなくなってしまうたりする生徒もいます。このような姿を見るたびに「英語力がアップしたと生徒自らが感じられる方法はないだろうか。しかも楽しく英文を読みながら。」と考えるようになりました。いろいろ模索して出会ったのが「100万語多読学習法」(Start with Simple Stories / SSS学習法)※です。まず私自身がこの学習法を行ってみて、その効果を実感しました。

*詳細につきましては <http://www.seg.co.jp/sss/> をご覧ください。

プログラムメソッド

多読授業を高校2、3年生を対象に、選択授業として週1回(45分×2)の通年授業を行っています。今年で3年目の取り組みです。また、今年度初めて全学年を対象に5日間の夏季集中講座(1回120分)を行いました。

グレイディッド・リーダーを中心に、絵本も揃えています。毎年、Oxford Bookwormsの「King Arthur (マンガ形式)」、「Robin Hood (マンガ形式)」、や「The Wizard of Oz」、「Alice's Adventures in Wonderland」など、子どものころに日本語で読んだことのあるものに人気があります。毎回約100冊の本を教室へ持参します。

評価

読んだ本の語数や読書に対する意欲など、総合的に判断して成績をつけています。

結果

2004年度に、最も多くの本を読んだ生徒は68万語を読みました。そして読書語数の平均は27万語でした。また、多読授業を受講した生徒29名に対して3学期にアンケートをとった結果、約90%が自分の英語に何らかの変化を感じました。その中で多かったものは、

1. 英文を読むスピードが速くなった
2. わからない単語でも意味を推測できるようになった
3. 英文への恐怖心がなくなった
4. 内容把握ができるようになった

です。また、多読授業に対して90%以上の生徒が「楽しかった」と答えています。生徒の感想には次のようなものがありました。

- だんだん自分が英語の本に慣れ、すらすら読めるようになるのを実感しました。
- 長いものを少しずつ読めるようになって嬉しかった！！
- 「日本語で書かれている本も読む気にならないのに、英語で書かれている本では続かないのでは？」と初めは心配していたが、英語の本を読んでいると新鮮さを感じられてとても楽しく読めた。
- 鉛筆を持たないで軽い気持ちで英語を勉強できて楽しかった。

アドバイス

「本を読む」ということは、一生楽しめることだと思います。日本語だけでなく、英語のペーパーバックが読めるようになれば、世界が広がり、その力は一生の財産になると思います。また1冊ずつ本を読み終えていくにつれて、英語の本が読めるという自信をそれぞれの生徒が持つことができ、より積極的に英語に関わる姿勢がみられます。読んだ本の感想を生徒と分かち合えるのが、何よりの楽しみです。

How to select your Oxford Graded Readers

- ✓ There should be no more than 2 or 3 unknown words per page. ✓ 知らない単語は1ページ2、3語以下であること。
- ✓ The learner can read 8-10 lines or more per minute. ✓ 1分間に8~10行のペースで読めること。
- ✓ The learner understands almost all of what is being read. ✓ 読んでいる内容の大意が理解できること。

If you are unsure, please call 03-3459-6481 for advice.
or visit our Graded Readers homepage for advice: www.oup-readers.jp

Oxford Bookworms and Dominoes are graded according to core structures, vocabulary and book length. Core structures provide the easiest means to select an appropriate level because the structural content reflects the grammar syllabuses of most English language coursebooks.

Bookworms と Dominoes は、主要構文、語彙、ページ数によってレベル分けされています。主要構文はふさわしいレベルを選ぶための目安となります。それは、構文内容が、ほとんどのコースブックの文法シラバスと対応しているからです。

OXFORD GRADED READERS SYLLABUS

The table below shows the core structures and the number of headwords for each stage of the syllabus.

下記の表はシラバスの各ステージごとのヘッドワード数および基本構成を表示しています。

		Starters 250 HEADWORDS	Stage 1 400 HEADWORDS	Stage 2: 700 HEADWORDS	Stage 3: 1000 HEADWORDS	Stage 4: 1400 HEADWORDS	Stage 5: 1800 HEADWORDS	Stage 6: 2500 HEADWORDS
present simple	単純現在形							
present continuous	現在進行形							
imperative	命令形							
can/cannot, must	can/cannot, must							
going to (future)	未来形							
simple gerunds	単純動名詞							
past simple	単純過去形							
present perfect	現在完了形							
will (future)	未来形 - will							
(don't) have to, must not, could	(don't) have to, must not, could							
comparison of adjectives	形容詞比較変化							
simple time clauses	単純時制							
past continuous	過去進行形							
tag questions	付加疑問							
ask/tell + infinitive	ask/tell + 不定詞							
should, may	should, may							
present perfect continuous	現在完了進行形							
used to	used to							
past perfect	過去完了形							
causative	使役							
relative clauses	関係詞節							
indirect statements	間接表現							
past perfect continuous	過去完了進行形							
passive (simple forms)	受動態							
would conditional clauses	条件節 would							
indirect questions	間接疑問							
relatives with where/when	関係副詞 where/when							
clauses of purpose, reason, contrast	目的、理由、比較を表す節							
gerunds after preposition/phrases	前置詞、慣用句の後の動名詞							
future continuous	未来進行形							
future perfect	未来完了形							
passive (modals, continuous forms)	受動態							
would have conditional clauses	条件節 - would have							
modals + perfect infinitive	完了不定詞							
so/such...that result clauses	so/such...that 節							
passive (infinitives, gerunds)	不定詞、動名詞を含む受動態							
advanced modal meanings	法助動詞の意味 (上級)							
clauses of concession, condition	条件節、譲歩節							



OXFORD BOOKWORMS
Library

- Starters (250 Headwords)
- Stage 1 (400 Headwords)
- Stage 2 (700 Headwords)
- Stage 3 (1000 Headwords)
- Stage 4 (1400 Headwords)
- Stage 5 (1800 Headwords)
- Stage 6 (2500 Headwords)



OXFORD BOOKWORMS
Playscripts

- Stage 1 (400 Headwords)
- Stage 2 (700 Headwords)



OXFORD BOOKWORMS
Factfiles

- Stage 1 (400 Headwords)
- Stage 2 (700 Headwords)
- Stage 3 (1000 Headwords)
- Stage 4 (1400 Headwords)
- Stage 5 (1800 Headwords)



OXFORD
Dominoes

- Starter (250 Headwords)
- Level 1 (400 Headwords)
- Level 2 (700 Headwords)
- Level 3 (1000 Headwords)



OXFORD Bookworms Library

Series Editor: Jennifer Bassett

- ▶ Jr. and Sr. High / Adult
- ▶ 7 Levels
- ▶ British / American English
- ▶ Beginner to Advanced



Stage 1 (400 Headwords) ▶ Recommended Level: 高校1年生



- Library Stage 1
人気タイトルランキング
(Top 5 titles)
- ① The Phantom of the Opera
 - ② The Monkey's Paw
 - ③ The Elephant Man
 - ④ The Wizard of Oz
 - ⑤ The Adventures of Tom Sawyer

Reader

Starters: ¥520
Stages 1,2,3: ¥630
Stages 4,5,6: ¥740

Every title in the *Bookworms Library* is a good read and there is a wide choice of stories to satisfy any student.

Bookworms Library シリーズは、読み物として非常に優れ、また様々なジャンルからお選びいただくことができ、学習者のニーズにお答えしています。

1
The dancers

'Quick! Quick! Close the door! It's him!' Annie Sorelli ran into the dressing-room, her face white.

One of the girls ran and closed the door, and then they all turned to Annie Sorelli.

'Who? Where? What's the matter?' they cried.

'It's the ghost!' Annie said. 'In the passage. I saw him. He came through the wall in front of me! And ... and I saw his face!'

Most of the girls were afraid, but one of them, a tall girl with black hair, laughed.

'Pooh!' she said. 'Everybody says they see the Opera ghost, but there isn't really a ghost. You saw a shadow on the wall.' But she did not open the door, or look into the passage.

'Lots of people see him,' a second girl said. 'Joseph Buquet saw him two days ago. Don't you remember?'

Then all the girls began to talk at once.

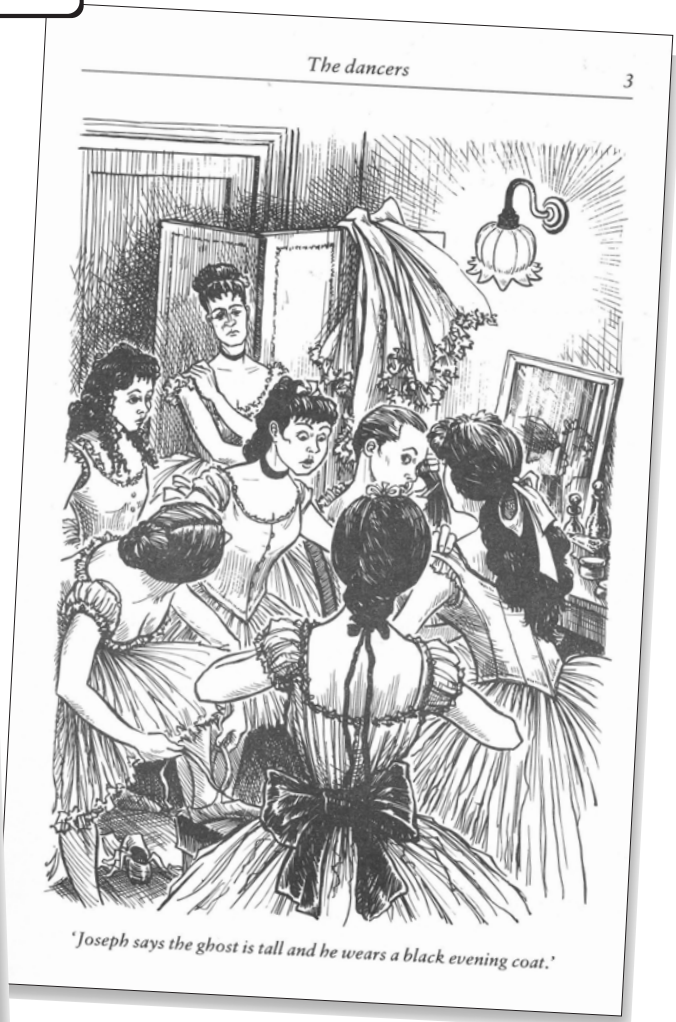
'Joseph says the ghost is tall and he wears a black evening coat.'

'He has the head of a dead man, with a yellow face and no nose ...'

'... And no eyes – only black holes!'

Then little Meg Giry spoke for the first time. 'Don't talk about him. He doesn't like it. My mother told me.'

'Your mother?' the girl with black hair said. 'What does your mother know about the ghost?'



from *The Phantom of the Opera*, Bookworms Library Stage 1

Bookworms Library Set 15% off!

Set A ¥56,000 (本体¥53,334) 5975693 (9780195975697)



All 109 books published as of October 1, 2005 from the Oxford *Bookworms Library* stages: Starter, 1, 2 and 3.

セットAは2005年10月1日現在、既刊のタイトルStarter, 1から3の合計109冊が含まれます。

Set B ¥41,000 (本体¥39,048) 5975707 (9780195975703)



All 66 books published as of October 1, 2005 from the Oxford *Bookworms Library* stages 4, 5 and 6.

セットBは2005年10月1日現在、既刊のタイトル4から6の合計66冊が含まれます。



オックスフォード会員制サービスは、
中学・高校・短大・大学・専門学校の先生方のための、会員制サービス・プログラムです。
現在日本の中学・高校・短大・大学・専門学校で教えていらっしゃる先生方であれば、
どなたでもご入会いただけます。



詳しくは下記HPをご覧ください。

www.oupjapan.co.jp/cluboup/

この手引きは、日本語版・英語版ともに弊社ホームページからもダウンロードできます。
他の教材の手引きとあわせてご利用ください。

http://www.oupjapan.co.jp/teachers/tebiki_jp.shtml

オックスフォード大学出版局

www.oupjapan.co.jp

TEL: 03-3459-6481

email: elt@oupjapan.co.jp